

実践4 長期研修におけるPATHの技法を用いたワークショップ

齊藤 宇開

(知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室)

1. 目的

PATHはカナダのInclusion Press InternationalのJack PearpointとMarsha Forestによって作成された障害者本人とそれにかかわる多くの人が一同に会してその人の夢や希望に基づきゴールを設定し、そのゴール達成のための作戦会議である。PATHは課題を明確にし、それに向けて話し合いをし、問題を解決していく課題解決型の方略である。

*PATHの手順:必要な時間、場所、用意する物、実施するまでの手続きについては、巻末の資料1「教師の連携・協力を促すワークショップーPATHの技法」を参照。

2. 方法

日時：平成15年4月22日（火）17:00から19:00

場所：国立特殊教育総合研究所情報棟3階会議室

対象：知的障害教育研究部長期研修員6名（現職教諭）、国立久里浜養護学校奥教諭、竹林地室長、齊藤研究員、涌井研究員

計10名

2グループ、5名ずつに分かれて実施した。

なお、長期研修員は半分に別れ、竹林地、齊藤、涌井もそれぞれのグループに分かれた。

ワークショップにおけるPATHの手順

第1ステップ	第2ステップ	第3ステップ	第4ステップ	第5ステップ	第6ステップ	第7ステップ
幸せの一番星（夢や希望について語る）	ゴールを設定する・感じる	いまに根ざすこと（どこに私/私たちはいるのか）	夢をかなえるために誰を必要とするか	必要な力（どんな力を増したらいいか）	近い将来の行動を図示する	はじめの一步を踏み出す

3. ワークショップの経過

はじめに①：その子のことをイメージしてみよう

メンバーの一人が過去に担任したことのある児童を対象にして、その子のことをイメージする。

どんな子だろうか？ どんな「障害」ではなくその「人」は誰ですか？という視点で。何が好きなのか？ 誰が好きなのか？ 得意なことや苦手なことは？ その子のもっている力の強さ弱さは何か？



はじめに②：グループの中で役割を決めよう

本人、親、通常学級の先生、養護学校の先生、施設の職員、近所のおばさん、アドボケイト（権利を擁護する人）、サポーター、ボランティア、など。

第1ステップ：幸せの一番星

まずはじめに、幸せの一番星を思い描く。対象児の夢や希望について語り合い、「幸せの一番星」を模造紙の右上に自由に文字や絵で描いていった。その際、対象児にとって本当に幸せになることを話し合うように司会者が伝えた。



世界の焼きそば「けんちゃん焼きそば」を開店する。

第2ステップ：ゴールを設定する・感じる

次に、幸せの一番星に

本来のPATHでは非常に近い将来（1年後あるいは3年後）をゴールとして描くことが多いが、シミュレーションとして現職教員の研修として実施する場合、本人が学童期の場合が多いので、青年期（20歳前後）に設定した。まず、その時の年月日を記入することから始める。現実にとらわれず本人の人生を描くようにした。

2016年（対象児が20歳）に、世界の焼きそば「けんちゃん焼きそば」を開店するため、フランスに修行中である。世界中の焼きそばを食べ歩き、世界中の料理から「けんちゃん焼きそば」を考案するための旅をしている。

第2ステップまでに模造紙の右端は完成した。一番星という夢を語り合うことで参加者は、笑顔になり、会話も弾むようになっていった。

第3ステップ：いまに根ざすこと（どこに私／私たちはいるのか）

次に模造紙の左端に、現在の年月日を記入した。そして現在の実態とそれをどのように感じているかを記入していった。その際、ゴールに比較して今がどのような状況にあるのかを話し合い、その感じを出し合うことを重視した。

2003.4. 22好きなものは一人で食べてしまう。
いろんな人といっぱいお話しできるといいね。
学校に行きたくないよと、お母さんに甘える。
勉強したくない。
ずっと好きなビデオを見ていたい。
先生の言うことを聞かない。
好きなおもちゃ（特に機関車トーマス）を独占してしまう。

ステップ1と2によって、実態が自然に分かるようで、メンバー全てが対象児の現状について意見を述べることでできていた。

第4ステップ：夢をかなえるために誰を必要とするか

ステップ4では夢をかなえるのに必要な関係者の名前を挙げた。簡単に書き出すことができた。最初に「小田急ロマンスカーの人」が挙がるなど、様々な関係者が登場した。

小田急ロマンスカーの人
お父さん、お母さん
近所の「焼きそば屋」のおじさん
イトーヨーカ堂の店員
先生
近所のおじさん
サポーター、ボランティア
地域コーディネーター
おじいちゃん、おばあちゃん
彼女（心のサポーター）
ABIVA（英会話）

第5ステップ：必要な力（どんな力を増したらいいか）

ステップ5では、必要な力を挙げた。このステップも早い時間で簡単に書き出すことができた。

体力
あいさつ
やりたいことを伝える
何でも食べる
お金を使う、計算、計量
清潔感
外出、遠出
いろいろな乗り物に乗る
焼きそばを作る
家族の役に立つ、お手伝い

第6ステップ：近い将来の行動を図示する

ステップ6では、近い将来の年月日の記入から始めた。話し合いの結果、1年後を想定しようということになった。

焼きそばを一人で作れるようになっている。
「おはよう」とあいさつできる。
買い物でお金を払っておつりをもらうことができる。
電車に乗る経験をたくさんしている。
友達と遊べる。
家でのお手伝いが増えている。

第7ステップ：はじめの1歩を踏み出す

最後のステップ7は、参加したメンバーそれぞれが家に帰ったときにまず何をしなければならないかについて話し合った。

土曜日の昼食は焼きそばの日と決めて、お母さんと一緒に作って食べる。
野菜を切った後、フライパンに入れるお手伝い

をお願いする。
電車通学できるように保護者と話し合う(先生)。
コンビニに買い物に行く。
おじさんに毎日あいさつする。

4. ワークショップを終えての感想, 考察

メンバー全てが、「幸せの一番星」を出発点にすることで、従来の現実から徐々にステップアップしていく事例研究に比べ、とてもスムーズに協議が進んだという感想をもった。真っ先にグループで大きな夢を語ることができ(時には、現実離れしたようなことも協議された)、アイスブレイクにもつながって、ステップ3以降のスムーズな協議につながったと考える。作成には様々な色を使い、図を作成するにあたっても楽しみながら取り組むことができた。

大きな夢からのステップであったが、各ステップの段階は、しっかり把握しながら進行することができた。

最後に個別の指導計画の作成での期待される効果を感想として述べあった。

- ・様々な色を使って、文字だけでなく絵を入れることにより、楽しい作業だった。年度当初の事例検討会などで、大変有効だと思う。是非活用したい。
- ・「一番星」を皆で共有することが、こんなに具体的な「今何をすべきか」に結びつくことに感動した。
- ・「一番星」を協議している時は「現実離れしすぎてるのでは?」と、どうなることかと思ったが、作業を終えてみると、とてもいい指導計画ができた。夢を語り合うことがこんなに具体性を生むのですね。



写真1 第1グループの完成したPATH(本文の事例)



写真2 第2グループの完成したPATH

参考文献

干川隆・肥後祥治(2000) パートナリシップの原動力としての夢: カナダにおけるMAPSとPATHの紹介 障害児教育分野における協力・連携関係(パートナリシップ)の形成に関する調査研究. 国立特殊教育総合研究所研究成果報告書, 44-50.